

オンライン配信によるオンデマンド型動画授業実践

——私立小学校英語授業の事例より——

Teaching Practices in Online Distributed, On-demand Video Lessons

—A Case Study of a Private Elementary School's English Lessons—

三ツ木由佳・サラス ロビン

MITSUGI Yuka・SALAS Robin

I はじめに

新型コロナウイルスは、教育現場の従来のアプローチに大きな影響を与え、特に日本においては、ICT環境整備の課題をあぶりだした。文部科学省実施の「新型コロナウイルス感染症対策のための学校の臨時休業に関連した公立学校における学習指導等の取り組み状況について」まとめた調査結果によると、2020年4月16日時点での授業動画を活用した家庭学習の割合は10%、双方向型のオンライン指導を通じた家庭学習は5%という結果であった。これは、国内の教育機関におけるICT環境整備の早急な対応の必要性を物語っているととれる数字であるが、インターネット上では早くからオンライン学習に対応しようとした地方自治体や学校の実践事例が散見された。例えば、埼玉県立総合教育センターが小学校、中学校、高等学校の各校種の児童生徒向けに作成したYouTube学習動画集や、京都教育大学附属桃山小学校のロイロノート（クラウド授業支援アプリケーション）を活用したオンライン授業についてのウェブインタビュー、他には小学校受験情報サイトが「休校中私立小学校の取り組み特集」として全国の私立小学校22校へのインタビュー内容をもとに、各校が休校中に行った取り組みをまとめたものなどが挙げられる。

文部科学省の調査結果からもわかる通り、こういった取り組みは全国的に行われたわけではなく、日本の学校にとっての大きなチャレンジであったことは間違いない。いずれの実践においても、多くの教員にとっては初めての取り組みとして、何が正解かわからない中で試行錯誤したことは想像に難くない。かくいう筆者らも、2020年4

月の新学期早々より、勤務する京都市内の私立小学校においてオンライン学習がスタートすることとなり、英語科担当教員として、その試行錯誤を経験した。

筆者らの勤務校は、マイクロソフト・ショーケーススクールとしてICT教育に力を入れている小学校である。全国の学校に休業要請が出ていた期間、5・6年生がタブレットPCを所有していたこと、コミュニケーションツールとしてMicrosoft Teamsが導入されていたことなどをふまえて、休校という措置は取らず、動画配信の形でオンライン学習を家庭で進めていくという方針が出され、2020年4月から6月中旬にかけて全学年で取り組むこととなった。筆者らが担当する英語科では、2006年の開校当初より長期休暇用の学習ツールとして、リスニングクイズやチャンツ・ジングルなどにBGMをつけ、教員の音声を録音した自作音源を、CDとして児童に配布し、家庭で聞けるようにするという取り組みは行ってきたが、動画作成は初めての挑戦となった。

勤務校のようにオンライン授業による学びを継続した小学校のケースのうち、英語授業に特化した全国的な調査や報告は、筆者らの知る限りまだなされていない。また、あったとしても、どのような実践が具体的に行われたかについての詳細は報告されていない。そこで、本稿では英語専科教員として筆者らが勤務校で取り組んだ、オンライン配信によるオンデマンド型動画授業の具体事例を示し、取り組んだプロセスを通して授業者ら自身が得た学びと教訓を明らかにすることで、今後の教育現場におけるICTを活用した授業実践の一助としたいと考えた。

また、様々な校種で実践されたオンライン学習の成果と課題は、今後明らかにされていくと考えられる。それらの事例の一つとして、実践を記録しておくことが、オンライン学習というプラットフォームにおける校種の垣根を越えた新たな教育実践に繋がることを期待したい。

オンライン授業では、勤務校での通常の英語授業の要素を保持しつつ、児童が家庭でも「英語を聞く、読む」活動を中心とした学習を目的とした動画授業を行った。本稿では、その実践の具体的な内容をまとめる。また、その取り組みから、筆者ら授業者自身が改めて授業について振り返る機会を得られたことにより見出された教訓をまとめる。最後に、児童のアンケート回答をもとに、今後の授業改善に活かすべき留意点を抽出する。

Ⅱ 先行研究

新型コロナウイルス感染予防のため、全世界の各地で教育機関が休校となり、オンライン学習が促進されたが、この期間内の実践や研究の報告はまだ多くはない。各国の大学等の高等教育機関におけるオンライン学習の文献からその強みや課題を分析した報告（Dhawan,2020）、ESL/EFLのオンライン学習に対する学習者側の受け止め方をまとめたもの（Layali,2020）の他、早々にオンライン学習に切り替えた学校のケーススタディに加えて教員の省察を分析したもの（Basilaia,2020）などがある。これらはいずれも、海外の取り組みであり、国内の報告は、2020年9月時点では、服部ら（2020）、藤谷ら（2020）など医療系の教育現場での実践が挙げられるが、初等中等教育分野での実践についてはまだ報告がされていない。休校後、学校の再開と同時に新たな生活様式を取り入れながら学校教育活動を展開している真っ只中の現場からの報告は、もうしばらく待たねばならないかもしれない。

こういった状況において、Atmojo（2020）は、インドネシアでEFLを担当する16名の高校教員へのアンケート調査と、そのうち5名へのより詳しいインタビューを通して、オンライン授業実践の取り組みを詳細にまとめた。具体的には、教員から得た情報を3つに分類して代表的な意見を

まとめ、それらを分析している。

まず、教員が使用したアプリケーション等の具体例を挙げており、ZoomやGoogle Classroomなど日本でもおなじみのツールが活用されていたことが分かる。

次に、オンラインEFL（English as a Foreign Languageの略で外国語としての英語を指す）学習における実践方法が報告されている。インドネシアでは、課題の締め切りを設定し、その期間内に生徒が各自のペースで取り組むといった方法（asynchronous mode）ではなく、大半の教師は学校の方針により、決まった時間にオンライン学習を実施した教員が大半を占めたということである。

教師らのアンケート記述とインタビューから浮かび上がった、時系列に沿った実践の具体からは、対面授業で取り組んでいるプロセスとほとんど変わりがなかったことが指摘されている。つまり、教師が教室でやっていた授業をオンラインに置き換えただけであり、教師自身が、学習環境の違いをさほど考慮に入れていないこと、オンライン学習にあたってテクノロジーの活用を最大限に生かそうとはしていなかったことについても言及している。また、教師がよりクリエイティブにオンライン学習環境を活かした実践に取り組むためには、教師自身がオンライン学習を通して知識を深め、指導技術を向上させていく必要性を指摘している。

そして最後に、教員が直面した課題を明らかにし、その原因を探っている。主な課題として挙げたのは家庭でのデバイス使用の問題で、インターネット回線の不具合や、接続にかかる費用の問題に加えて、生徒が個人的に使える端末の不足など、学習環境整備を指摘している教員が多かったことが挙げられている。また、生徒のデジタルリテラシーの低さに加えて、全般的な読解能力の低さに起因する課題が露呈したことも明らかにされた。

これらの教員の省察の分析は、筆者らが行った動画授業実践の経験とアンケート調査から見えてきた児童の実態に類似する部分が数多くあった。国が違い、校種が違っても、初めて経験したオンライン学習の実態や教師や生徒が直面した課

題には、多くの共通点が見いだせることが分かった。

このインドネシアの高等学校におけるオンライン授業実践と教師の省察分析は、コロナ禍における中等教育現場の状況をいち早く伝えている数少ない例で、現場の教員にとっての教育的示唆に富み、意義深い研究であると言える。

冒頭で述べた通り、小学校の教育現場におけるオンライン授業については、国内外を通して、まだ報告がなされていないことを受けて、次節より、筆者らが経験した小学校でのオンライン配信によるオンデマンド動画授業の実践の具体について報告する。

Ⅲ 小学校英語におけるオンデマンド型動画授業の実際

1 英語動画授業実践に至る背景

通常授業では、日本人専科教員とネイティブ教員のティームティーチング体制を取っており、英語でのやり取りを存分に聞かせ、やり取りする中で、「英語を聞いて理解する」「聞き続ける姿勢を育む」ことに加えて、発達段階に応じた「読む・話す活動」を取り入れた授業を行っている。1、2年生は週2回、3年生以降は週3回あり、一般的な小学校より多くの授業数が確保されている。全学年、英語で授業が進められ、豊富なインプットを与え、テンポよく多種多様な活動に取り組む中で、小学生の発達段階に応じた英語学習を進めている。小学校という発達段階の特性を大切にテーマ別カリキュラムで、二人の教師の英語でのやり取りに児童を巻き込みながら進める授業がベースとなるため、これらの要素を動画授業に置き換えるにあたっては、動画配信の準備段階から配慮すべき点が数多くあった。ここでは、まず動画授業作成のプロセスをまとめ、次に実際に取り組んだ2か月間の動画授業の内容についてまとめる。筆者らは、小学校2年生、4年生、6年生の授業を担当し、2年生と4年生には週1回、6年生には週2回の動画授業配信を行った。1、3、5年生も同様に、各学年の授業担当者らが動画授業配信を行ったが、本稿では、筆者らが授業担当者として直接関わった2、4、6年生に絞って報告する。

なお、ここでは作成した動画を授業として位置づけ、以後「動画授業」という言葉を使う。

2 動画授業の配信方法

まず、学校として、小学校1年生から6年生という幅広い発達段階とデジタルリテラシーを考慮した時、保護者の支援なしに決まった時間に自力で遅延なくオンラインで接続させることの負荷が予想できた。そこで、4月は週2回、5月以降は週3回の20分程度の朝のショートホームルームに限っては時間を決めてZoomを使って実施し、担任教員やクラスメートと交流する機会は設けた。教科学習については、オンライン配信により、各家庭の状況に合わせて動画授業を視聴できる形式を取った。そして、前述の通り、英語科の授業は、そもそも教室においても教師からのオーラルインプットを学習の軸として進行させていたことから、教材や課題を配信して個々に学習を進めるというスタイルではなく、動画授業を視聴する形が妥当であった。加えて、児童の自習学習、または家庭学習としては復習が主だったため、事前に英語教材を配布して予習させる習慣がなかったこともあり、授業同様に、教師のやりとりを聞いたり、スライドを見ながら英語を聞いたりして、理解を確認するためのワークシート冊子を手元に置かせ、「理解すること」に重きを置いた形の学習形態を取ることにした。

このオンデマンド型動画授業を進めるにあたり、活用した主なツールは、You Tube、Classting、Microsoft Teams の3つである。

動画配信にあたっては、限定公開の方法でYouTubeを活用した。筆者らが担当した、2年生及び4年生の児童及び保護者へのコンテンツ配信にあたっては、You Tubeにアップロードした動画のURLを張り付ける形で、Classtingを活用して情報を共有した。Classtingは学校から保護者への連絡ツールとして以前より活用している限定公開のSNSである。6年生は、児童が一人一台のタブレットPCを所有していたことから、児童の端末にインストールされていたグループチャットアプリケーションであるMicrosoft Teamsを通して課題を提示し、Teams内のアプ

リケーションである Stream で動画配信を行った。児童は自分のタブレット PC を用いて、教師からの情報を保護者を介さず直接得ていた事、また、投稿機能を使って質問やその応答が可能であったことは、2年生、4年生とは異なる状況であった。ただ、クラスごとに設けられた教科毎のセクション内での投稿機能であるため、クラス全員に共有されることが前提となり、個々の児童への対応は必要な場合のみに限られていた。保護者も Microsoft Teams のアプリケーションを自身のスマートフォンや PC などにダウンロードすることが可能であったため、児童が得ている情報の視聴が可能であり、家庭によっては保護者から児童への声掛けもあったと想定される。5月以降は、1年生から4年生にもアカウントを配布し、各家庭の端末にアプリケーションをインストールしてもらい、双方向のやりとりをする場所を確保した。

また、6年生は児童からの課題提出ツールとして、ロイノートも活用した。

それぞれに運用を進めながら、改良を加えていったわけだが、動画授業による学習スタイルでは児童の反応がどうしても見えにくいことから、高学年には、自身の学習の振り返りを兼ねたオンラインアンケートを実施した（4月中旬に2回、登校再開直後1回計3回実施）。児童自身の学習スタイル・量・内容、学習コンテンツに対する感想、または困りごと等についての率直な意見・感想を集約し、それらを元に動画授業改善に活かすことができた。次節では、動画授業の具体的な内容を述べる。

3 動画授業の具体的な中身

普段の45分間授業の中では、4～6つ程度の多種多様な活動に取り組んでいる。それは、英語を聞き続ける集中力を途切れさせず、また、多様な英語に触れることを大切にしているからである。そういった勤務校の授業の要素を保つことを意識して、一度に配信する動画の種類と数を選定していった。

担当学年のカリキュラム内容に沿って、動画授業であっても学習が成り立つコンテンツを選定していったところ、最終的に約2か月半のオンライ

ン学習中に、担当した3学年を対象とした動画授業は、計182本に至った。内訳は、2年生-58動画、4年生-47動画、6年生-58動画、絵本の読み聞かせ-16動画、歌-3動画である。

通常の授業では、歌や絵本を必ず取り入れているが、著作権の関係上、活用には制限が多く、絵本については出版社より特別許可をいただく事で、活用が可能となった。歌についてはパブリックドメインのある歌のみに絞ったため、数は少なくなっている。また、6年生向けには、教員が動画を作成している際の失敗場面などの様子を集めたNG集も動画として作成し、お楽しみ動画として共有した。

勤務校からは英語だけではなく、すべての教科の動画授業が配信されることから、受け手側となる保護者の負担を最大限に減らすために、情報共有内容については、一読して理解してもらえよう文面や動画の見せ方を熟考したことも、オンラインならではの配慮事項であった。同時に、授業一つ一つの具体的な内容を保護者と共有することも、初めての経験であり、動画授業の大きな特徴の一つであったと言える。通常授業であれば、単元名を伝える程度のところを、ここでは保護者のサポートを前提として学習を進めたことから、特に低学年においては、保護者が理解しうる文面で、児童がすべきことを完結に伝えることが大きな留意点であった。以下の抜粋1及び2は、4月第1回目の授業として配信した内容である。

6年生には、Microsoft Teams 上で、児童に直接伝える形であったため、比較的授業に準じた形で運用ができた。保護者には、別途 Classting を通して、その週の学習内容を簡単にまとめたものと課題を伝えた。

V 動画授業コンテンツとタスクの分類

1 動画授業の内容

次に、これらの動画授業の実際の内容についてまとめる。種類としては、大きく分けると表1で示す5つに分類された。発達段階を考慮し、指示理解が可能であること、手順が分かりやすいことなども含めて、一人で取り組めることを想定した活動である。

【抜粋1】 2年生4月第1回配信教材

<2年生のみんなへ>
Hello!2年生！元気になっているかな？
 2年生の英語をたんとうする三ツ木ゆかです。どうぞよろしくね！英語の先生たちで作ったじゅぎょうムービーをおくります。いつものじゅぎょうと同じように、先生たちといっしょに、声に出して英語を言ってみよう！何回も聞いているうちに、わかる英語は、どんどんふえていくよ。たのしみながら、がんばっていきましょう！
 <保護者の皆様へ>
 今年度、英語を担当させて頂く三ツ木です。どうぞよろしくお願ひ致します。
 ○○、○○と3人で担当させて頂きます。
 配信動画数が多いですが、どれも数分間の短いものになっています。
 ②⑨⑩は、モジュール②、歌⑨、絵本⑩です。
 子ども達には、繰り返し一緒に声に出して楽しんでもらえたら嬉しいです。
 冊子に書き込む活動は、動画内で答え合わせができるようになっていきます。
 “Writing” (P.2～P.6) は、視聴後じっくり取り組むものです。あたたかい励ましをどうぞよろしくお願ひ致します。
 ※以下、①～⑩ YouTube URL は本稿では省略。
 ① teachers' self-introduction (先生じこしょうかい)
 ② Let's try module! (英語モジュール)
 ③ listening quiz ①ワークブック P.1
 ④ listening quiz ②ワークブック P.1
 ⑤ face parts (顔の部分の名前) ワークブック P.7
 ⑥ alphabet writing 1 (アルファベットを書こう) ワークブック P.2
 ⑦ alphabet writing 2 (アルファベットを書こう) ワークブック P.3
 ⑧ Phonics ① ワークブック P.10
 ⑨ Story time ① “Grandma's Glasses”(絵本の読み聞かせ)
 ⑩ Let's sing! “Muffin Man” (いっしょに歌おう！)

【抜粋2】 6年生4月第1回配信教材

①ロビン先生の自己紹介リスニング・学校紹介を英語でしよう・useful expressions
 ②ワークシート P.1,2,3,9 は動画を見ながら取り組む。
 ワークシート P.12 Expressions ④ part1 は宿題
 <配信動画>
 ① Intro of video lesson
 ② Robin-sensei's self-introduction ワークブック P.2 challenge 1
 ③ Listening Quiz(teacher's self-introduction) ワークブック P.1
 ④ School Tour at Ritsumeikan ① ワークブック P.3
 ⑤ Useful expressions 1-10 ワークブック P.9
 ⑥ BONGO jobs ワークブック P.12

2 コンテンツの種類

(1) リスニングクイズ/BONGO

今回の動画授業ならではの必然性があると考え取り入れたコンテンツである。2, 4年生には既

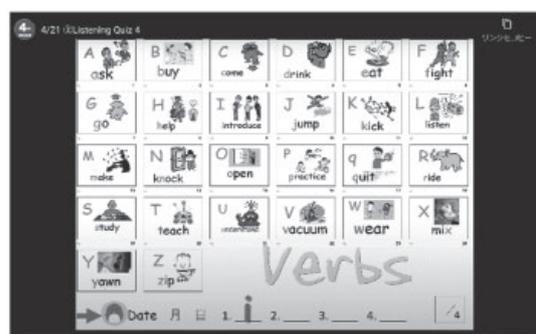
【表1】 動画授業コンテンツとタスクの分類

コンテンツの種類	タスク
①リスニングクイズ/BONGO	語彙のレビューとヒントクイズ、対話、少し長いお話、フォニックスの語彙等復習的な聞き取り
②やり取り A	会話に巻き込む・インタビューの聞き取り (低中学年)
②やり取り B	読み物教材の理解を促す (高学年)
③やり取り C	いろんな先生・校内で撮影し、「聞きたい！見たい！」を触発、インタビュー/やりとりの聞き取り (全学年)
④絵本の読み聞かせ・歌	お楽しみ動画として聞いて楽しむ,NG 集合む。* 絵本は出版社から許可取得の上、使用
⑤語彙などの反復練習	文字認識・フォニックス復習・リーディング・word shuffle

習語彙の復習となるような言語材料を扱った。6年生には、これらに加えて200words程度のお話を聞かせ、その内容理解を問うようなクイズや、英検に出てくるような、会話を聞いてその続きとなる文を選ぶ等のバリエーションを加えて取り組ませた。いずれの活動も、学習方法がシンプルで何度も聞けばわかってくるという点において達成感があったこと、また、特にBONGOはゲーム感覚で取り組めるため、楽しみながら取り組んでいる様子がアンケートからも見て取れた。児童の活動手順は以下の通りである。

- ①リスニングクイズ/BONGO(リスニングクイズ)
1. 絵と文字つきの語彙リストを見ながら、教師の発音を聞く。
 2. 教師の音声に合わせて、発音練習をする。
 3. いくつかの語彙に関してヒントとなる描写や説明を聞いて、どれか推測する。
 4. 動画授業末尾で答え合わせをする。

【抜粋3】 配信授業画面 (リスニングクイズ)



①リスニングクイズ/BONGO (BONGO)

1. 語彙リストを見ながら、教師の発音を聞く。
2. 教師の音声に合わせて、発音練習をする。
3. 語彙リストの中から好きな語彙を3つ選び、○をする。
4. 教師の話す描写などのヒントを聞き、自分の選んだ3つ全ての語彙が出てきたら BONGO となり、クリアとなる。

【抜粋4】 配信授業画面 (BONGO)

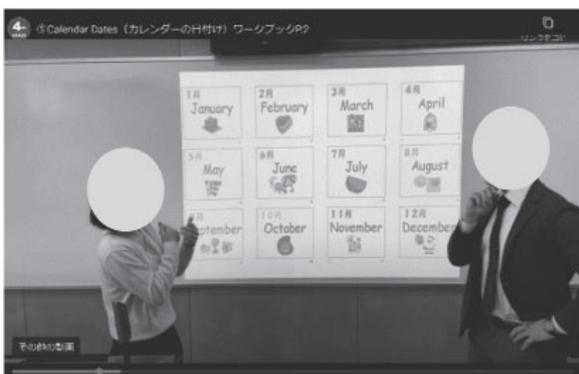


(2) やりとり ABC (教員が登場するタイプ)

本来の授業ならば、教師同士が英語でやり取りをするところを見せ、聞かせ、そしてそのやりとりに児童を巻き込みながら展開していく部分を、動画であっても、日本語を介さず聞いてわかる英語で話し、その場に児童がいるかのように語りかけるを通して、授業に近い環境を創り出した。

中低学年向けのやりとり A では、やり取りを聞いてターゲットとなる言語材料を聞いて理解し、教師同士がその言語材料を用いてインタビューし合っている内容を聞き取ると言ったタスクを設定した。

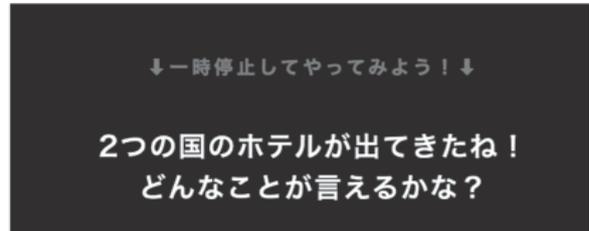
【抜粋5】 配信授業画面 (やりとり A)



高学年向けのやりとり B では、児童の手元の冊子にあるテキストの内容を、動画上でスライド

の視覚補助を見せながら、教師間のやりとりを聞かせた。そのようにして内容理解を促した後、児童は実際にテキストを読み、読後の課題に取り組んだ。

【抜粋5】 配信授業画面 (やりとり B)



動画の合間には、抜粋5の画面のように、理解したことを児童自身が言語化し、確認するタスクを設け、聞きっぱなしにならないような工夫も取り入れた。

動画の後半には、抜粋6の画面のように、読み物に音声を乗せて、聞きながら読めるようにすることで、個々の児童が自分の必要に応じて学習できるようにした。

【抜粋6】 配信授業画面 (やりとり B)



全学年で取り入れたやり取り C は、学校に来ることができない児童が学校や教員を身近に感じられる機会になればという思いから、校内の様々な場所で撮影し、英語科以外の教員にもインタビューなどで登場してもらった動画授業である。児童らは、これらの動画授業を最も好んでおり、登校が再開した後、これらの動画についてコメントする児童が多数いた。

【抜粋7】 配信授業画面（やりとりC）



抜粋7の画面では、教師がスクールツアーをしている設定で、特別教室などについて児童が説明するタスクを課した。

(4) 絵本の読み聞かせ・歌（お楽しみ動画）

児童にとってのお楽しみ的な活動として、絵本の読み聞かせや歌も取り入れたが、これらについては著作権に関わる課題に直面した。歌は、著作権保護期間が満了したパブリックドメイン認証が取得しているものに関わり、絵本については、出版社と直接交渉し、特別に許可を得られたものに関わり配信することができた。

また、児童のアンケート結果から、「自由読書がしたい」「絵本の読み聞かせをしてほしい」といった声が複数あったことから、5月は教師が登録するだけで活用できるオンライン読書ツールとして、Oxford Owl (<https://www.oxfordowl.co.uk/>)を導入した。読み上げ機能もあり、200冊近くの楽しい絵本を無料で読むことができることから、授業で活用しているシリーズの中から必読書を指定し、簡単な感想を書くことも課題とした。これまでの授業の中でも使えそうで、使えなかったツールであり、このオンライン学習期間を通して、学習ツールの幅を広げることができたものの一つであると言える。

(5) 語彙などの反復練習（教員が登場しない音声PPTスライドタイプ）

ドリル的な語彙反復練習等のタイプを指す。動画であれば、動画作成者が編集したタイミングで動画を進めることになるが、抜粋8のようにパワーポイントスライドをスライドショーモードで保存しておくことで、児童が自分のペースでク

リックし、スライドを進めながら音声を聞き、反復練習ができる。

今回のオンライン学習中には多用しなかったが、これらは、オンライン学習以前の授業内で児童にダウンロードさせて活用していたものでもあった。特に高学年児童はファイル自体の使い方には慣れていたが、Microsoft Teams 内でのダウンロード方法など、新たな課題も見えた。

【抜粋8】 配信授業画面（語彙などの反復練習）

Fill in the Blanks		-Have you ever-?
1	<input type="checkbox"/> () you ever () the aurora?	オーロラを見たことがある？
2	<input type="checkbox"/> —Yes, I have. I () () the aurora.	はい、オーロラを見たことがあります。
3	<input type="checkbox"/> —No, I haven't. I () () () the aurora.	いいえ、オーロラは一度も見たことがありません。
4	<input type="checkbox"/> Have you ever () cheese fondue?	チーズフォンデュを食べたことがあります？
5	<input type="checkbox"/> Have you ever () a () person?	有名な人に出会ったことがあります？
6	<input type="checkbox"/> Have you ever () a ()?	馬に乗ったことがあります？
7	<input type="checkbox"/> Have you ever () bubble tea?	タピオカミルクティーを飲んだことがあります？

V オンデマンド型動画授業実践から得た英語授業に対する新たな気づきや変化

1 授業者の振り返り

まず、教員間の振り返りを通して、本実践から得た新たな気づきや変化を述べる。動画授業実践中、及び通常授業再開後の筆者ら教員間の多くのディスカッションから、普段以上に個々の児童のペースに寄り添う方法についての意識が高まり、どう授業を改良すべきか考えるようになったことが最も大きな変化だと言える。

オンライン学習開始2週間後に、6年生児童への第1回目のアンケートを取ったところ、「もっとチャレンジングなことをやりたい」、「動画授業を見ることに精いっぱい」など受け止め方の個人差と、個々のニーズにマッチした学習にしていくな必要が浮き彫りになった。そこで、第2回目の冊子を郵送する際には、6年生に対しては課題の取り組み方を複数提示し、児童自身に選択させたり、タスクを完了した児童向けにさらに次のタスクを用意したりするなど、より主体的にその学習に向かわせようとする意識が働いた。登校が再開した後の授業においても、個々のペースで取り組めるようなプラスαのタスクをワークシート上で設け

るようにしたことは、動画授業の経験が影響したと省察する。

普段の授業では、提出物の把握や机間指導をしながら児童が困っている部分をその都度、教師が見つけて支援の働きかけができるが、動画授業においては時間配分を含めて、判断すべてが児童に委ねられた。その結果、普段の授業以上に、児童の取り組む速さや取り組み方の違いを、教師は目の当たりにすることができた。また、教師側は最大限の想像力を働かせて個々の児童が困らないよう課題の提示方法も工夫したが、プロセスの中では支援ができないジレンマも経験した。教師にとって、もともと存在していた“個人差”がより明確に可視化され、直視せざるを得なかったのではないかと考えられる。

このような経験を経たおかげで、筆者らは、通常授業に戻った後の一斉授業の中で、個々をより一層意識して授業をデザインしていきたいと強く感じた。そこを無視して今後の授業はできないという、授業への大きな反省を促された。友だちや教師とやり取りをしながら、共に学びを進めるクラス全体での授業の良さは活かしつつ、他方で個々のペースで取り組む活動を組み込んでいく工夫を大事にしていきたいと考えている。

一方で、何をやるにしても新たな手間と時間がかかることは間違いなく、どう折り合いをつけていくのが、今後の課題になっていくのであろう。

別の観点からの変化としては、動画教材を作成することへのハードルが格段に下がった事である。オンライン学習が終了した後の夏休み課題としても動画を配信したり、課題の解説動画を作成するなど、これまでとは異なる教材開発が進められている。それは、教員の動画作成ノウハウ、気を付けるべき点を掌握済みのため、作業時間の予測がつくことにより実施が可能になったと言える。

2 児童のアンケート分析

次に、児童側が今回の動画授業をどう受け止めたのか、またその要因を分析する。

今回の動画授業実践にあたっては、合計3回にわたって6年生児童120名にアンケートを取り、

児童自身の学びに対する捉えを把握しようとした。第1回と第2回は、オンライン授業中にウェブアンケートを活用して実施した。第3回は、学校への登校が再開した直後の授業で実施した。第1回と第2回はアンケートの回収率はそれぞれ、81%と72%であり、最後に実施したものは100%であった。4年生児童は、個々にタブレットPCを所有していないことから、登校再開後に紙面でアンケートを取った。2年生は、2か月半にわたったオンライン学習の振り返りは発達段階的にそぐわないため実施しなかった。

ここでは、6年生のアンケート結果から、「動画授業はどうだったか。」という質問への回答に特化して報告する。この質問に対して、「楽しかった」「まあまあ楽しかった」「いつもとあまり変わらなかった」「大変だった」「とても大変だった」という5つの選択肢を設けた。ざっくりとした質問だが、その選択肢を選んだ理由を記述させることで、動画授業全般に対する印象から、児童側の受け止めを探ろうとした。

結果は、「楽しかった」-22.9%「まあまあ楽しかった」-26.3%、「いつもとあまり変わらなかった」-5.9%、「大変だった」-32.2%、「とても大変だった」-12.7%であった。

○楽しかった・まあまあ楽しかった（49.2%）

この選択肢を選んだ児童の理由として、以下の5つの要素が浮かび上がった。

- 要素1 動画授業自体の楽しさ・いつもと違うことへの新鮮味
- 要素2 個々の活動の楽しさ
- 要素3 タスクに取り組んだことへの達成感
- 要素4 自分のペースでできること
- 要素5 ICTスキルの向上

具体的なコメントには、「普段ではない楽しさがあった。」「先生が楽しそうにやってくれていたのが楽しめました!」「直接は話せないけれど動画を見るのは楽しかったからです。」「先生の話が面白い」、「先生の劇などが面白かった」といったコメントもあり、教室でのやりとりを疑似的に

体験しているような感覚で、動画に面白さを感じていることが推察される。

この項目を選んだ児童にとっては、与えられたタスクが難しすぎず、簡単すぎず、児童の英語力に合致した内容を提供できたのではないかと考えられる。いつもとは異なるタスクに、新鮮味を感じながら楽しく取り組み、それを達成する喜びを感じていることが記述から受け取れた。また、パソコン操作においても自力で何とかできるスキルが備わっていたことから、そのスキルを向上する機会になったことを喜んでいる。また、特徴的な要素として、自分のペースで学習を進めることに充実感を感じていることから自立した学習に向かう姿も見出すことができる。時間配分を含めて、教師や友達の助けを得られない環境下において、自分で何とかせねばならず、それをやり遂げたことによる達成感は、普段の授業より感じる事ができたのではないかと考えらえる。

○いつもと変りない（5.9%）

あたかも教室で授業を受けている雰囲気が出るように、やり取りをふんだんに取り入れて動画授業を作っていた授業者の意図を汲み取っていたかのように、動画授業であってもその活動自体の意義を、普段の授業と同様に受け止めていると受け取れる反応である。

○大変だった（32.2%）

要素1 パソコン操作

要素2 量の多さ

要素3 質問ができない

この項目を選んだ児童のコメントのうち、最も多かったのがパソコン操作に関わるものだった。続いて、量の多さが挙がっており、質問がすぐできないことへの困難さを挙げた児童も数名いる。課題自体に難しさを感じ、加えてパソコン操作の不慣れもあいまって、負担感が増したことがうかがえる。また、困った時に、質問ができない環境であったことにより、解決したくてもできなかった状況が浮かび上がった。

○とても大変だった（12.7%）

要素1 パソコン操作

要素2 内容自体の難しさ

要素3 量の多さ

ここでもパソコン操作についてのコメントが最も多かったが、この選択肢を選んだ全ての児童が、別の質問でも「動画の数が多い・やや多い」を選択していた事を含めて、パソコン操作への不慣れであることから、思ったように学習を進めることができず、量の多さを必要以上に感じているようにも受けとれる。また、内容の難しさを言及した児童はこの項目を選択した児童のみであり、理解度の差が大きく影響していることがわかる。

また、普段の授業では、教師のその場に応じたジェスチャーや視覚的な補助を手掛かりにしたり、教師がわからない様子を察知して追加的な説明を加えたりするところ、動画授業では、書かれた指示を読んで理解せねばならない場面が多く、課題に至る以前にその指示を理解する力が乏しかった部分での困難さもあったのではないかと感じられる。

これらの児童のコメントから見えてくるオンライン学習時の実態は、先行研究で挙げたインドネシアの事例と類似する点が非常に多いことが分かる。本実践は、学校の方針により、動画配信という手法のみであったため、対面での質疑応答の機会や、個々の児童とのやり取りは非常に限られたものであった。ただし、期間中には児童とのコミュニケーションの場として、毎日1時間ほど自習室として zoom を開き、教科を問わず学年団の教員が2名ほど待機し、必要に応じて関わられる場を設けるなど、プロセスの中で改善されていったこともあり、教師も初めての取り組みに試行錯誤しながら学んでいったと言えるだろう。

概ね、授業担当者が想定していた範囲で動画授業を運用できたと考えられるが、インタラクティブ授業を希望する声や、「先生と生でやり取りをしながら教えてほしい」といった声に応えることができなかったことは悔やまれる点であり、そういった機会を適切なタイミングで積極的に提供す

ることができれば、児童の困りごとを解決するだけでなく、児童自身がより前向きに自律した学習に向かうきっかけを与えることができるのではないかと考えられる。工夫の余地はまだあると考えられるが、動画授業のみで取り組ませる限界は、事前の個別支援の手立てに左右されると言える。

Ⅵ 本動画授業実践の成果と課題

本節では、成果と課題を①～⑤として提示した上で、それらの関連性をまとめたい。

1 成果

先行研究で示した Atmojo (2020) では、教師自身が学習環境の違いをさほど考慮に入れず、テクノロジーの活用を最大限に生かそうしていなかったことが課題として挙げられていたが、本実践では対面授業とは異なる学習環境下だからこそ①「動画授業の強みを活かした教材作成」に取り組むことができた。既存の教材を動画授業ならではのコンテンツに改良したり、個々に取り組むゆえに何度も繰り返し視聴できるリスニング・リーディング教材を多数作成したりすることができた。

また、授業を動画で作るというプロセス自体が、教員にとっては自身の授業を振り返る機会となっていた。そして、それらの省察と児童の反応や学習へ取り組み方への分析を通して、対面授業以上に、児童間の「個人差」が明確に可視化され、これまで以上に児童に寄り添った授業づくりへの意識の変化が生まれた。この変化が②「個人差への対応を加味した教材と取り組ませ方の改良」に繋がった。自由選択課題を付加したり、活動の取り組み方法を児童自身に選ばせたりするなどの学習展開は、個人学習に特化したオンライン学習期間がなければ、教員自身が自らを強いて経験することはできなかったであろう。

最後に、③「教師の ICT スキルの向上」が挙げられる。本実践を通して、活用できるアプリケーションの種類が増幅と使用頻度が飛躍的に上がった。ICT スキルは一度身につけてしまえば、動画編集等にかかる時間が短縮されることも体感し、効率的な活用が進んだ。また、児童及び保護

者の UX (User Experience) の向上に向けた改良と工夫を重ねたことにより、オンライン上のコミュニケーションへの配慮意識が高まったことも、副次的な成果と言える。

2 課題

今回、初めて経験したオンデマンド型動画授業実践を記録としてまとめ、その取り組みを省察し、オンライン学習期間中の児童の学習の様子、そしてアンケート記述を分析するプロセスを通して、筆者らが共通して最も強く感じた課題は、④「自律した英語学習者の育成」であった。Richards (2010) によると、「自律した学習者とは、自分の学習を管理し、目標、学習プロセス、および自分の言語学習の必要に応じた学習への取り組みに関する決定に責任を負う能力の結果」(筆者訳)と定義されている。今回のオンライン学習で、学習方法をいくつか提示することで、児童自身が自分に合った方法を選び、学習を調整していく経験が一つの手立てになりうる可能性が見いだせた。今後、対面授業においてもその検証を進めていきたい。

また、ICT という側面からも大きな課題を突き付けられた。自律した教科学習を進めていくためには、⑤「児童の ICT スキル習得」はさらに重要であり、個々の必要に応じて ICT を使いこなせるスキル育成は、学校に課せられた喫緊の課題である。それは、児童のみならず、保護者の啓蒙を含めた取り組みであるべきであり、一教科の中で取り組めるものと、学校という枠組みの中で取り組む必要のあるものとを分けて考える必要がある。

3 まとめ

最後に、①から⑤の成果と課題がどう関連づいているのかをまとめ、本実践報告の結語としたい。

まず、③と⑤は、教師と児童、しいては保護者も含めた ICT スキル向上の必要を示唆している。今後の学習環境において、ICT スキルは言うまでもなく今以上に活用されるべきものであり、このオンライン学習期間を経たことにより、学校と家庭双方での必要性が明らかになった。

次に、②の改良は、④の課題への気づきから生まれたものであるが、今後の対面授業における個別学習の取り入れ方については、①の成果をもとに、さらに検討を重ねていくべきことである。具体的には、オンデマンド型の教材を活用した家庭学習や反転学習のアプローチ等が考えられる。

今後も引き続き、ICTスキル向上を通して、自律した英語学習者を育てるための活用ツールを教師が幅広く持てるよう、研鑽を積んでいきたい。

引用文献：

- 文部科学省（2020年4月）「新型コロナウイルス感染症対策のための学校の臨時休業に関連した公立学校における学習指導等の取組状況について」
https://www.mext.go.jp/content/20200421-mxt_kouhou01-000006590_1.pdf
- 埼玉県立総合教育センター（n.d.）「YouTube 学習動画集」
center.spex.ed.jp/ 埼玉県立総合教育センター / 小学生向け - 学習動画
- 学校受験新聞（2020年6月21日）「休校中私立小学校の取り組み特集」
<http://www.jyukennnews.com/02study/storikumi.sp.html>
- 服部稔・蓮沼直子・安達伸生・栗井和夫（2020）「広島大学医学部医学科における同時双方向型遠隔授業の試み」『医

- 学教育』 51,3, 240-241
- 藤谷 昌司・山田 壮史・永井 誠大・天野 佑（2020）「島根大学医学部におけるオンライン/オンデマンドの講義システムの構築」『医学教育』 51,3, 242-243
- みんなの教育技術（2020年5月14日）「オンライン授業を少人数のプロジェクト制で機動的に進めている学校事例」
<https://kyoiku.sho.jp/49073/>
- Atmojo, A. (2020). EFL Classes Must Go Online! Teaching Activities and Challenges during COVID-19 Pandemic in Indonesia *Register Journal*, 13 (1), 49-76.
- Basilaia, A. and Kvavadze, D. (2020). Transition to Online Education in Schools during a SARS-CoV-2 Coronavirus (COVID-19) Pandemic in Georgia, *Pedagogical Research* 5 (4), em0060
<https://doi.org/10.29333/pr/7937>
- Dhawan, S. (2020). Online Learning: A Panacea in the Time of COVID-19 Crisis *Journal of Educational Technology*, 49 (1), 5-22.
- Layali, K. (2020). Students' Perceptions of e-learning for ESL/EFL in Saudi University at time of Coronavirus: A Literature Review
Indonesian EFL Journal, 6 (2), 97-108.
- Richards, C., and Richard, S. (2010) Longman Dictionary of Language Teaching and Applied Linguistics. Longman, p.44.